物見塚記

へ5
4526

物見塚記

東都日くらしの里に寺あり本行寺といふ庭
にひとつの塚あり周廻五間高さ七尺頂に
一株の松を植て十のつゐの乃ちをまさこなるへし
塚なる所は断岸にして高さ丈余東南の眺望は須
弥の金輪際つきるかと彼大勝の雲夢を
呑わこころを優游にあそはしむる地なれ
筑波大人の碑文に道灌丘といへるもこれにて

東都日暮里なる

物見塚記

大ゝ坊一露編

門 へ 號 4526 卷 5

江戸の地誌にハ物兄塚と出されざるは後人の
多異にあらつけて名は志るゝものあるへし主人
名ハ植雅字ハ日植号ハ彌ハ境隣といひ又風粒
して知足坊の一瓢と称ス後ニ茂許内に於て
此名凡清矣於顔回にならへむるをよむて
名かもあの巣鴨そむの乾に近く京廠山武鷹
寺を南にあらひて隣まるゝ都鄙の境に出て
塵芸を芟し耳目の閑か修するの所也むかし

し灌公江戸の城をきつき給へる比にも此寺に
吾の兄弟梅松のまきかわしとて其序百首
江戸哥合慕京集ちりも世の人の志ちちらず
また文武のみちくあしく出千戈のけきまにむすび
飛月さきよくの処もちむら日陰梅の其
江一字梅精其名なりて雛一年ありとなる
太田歴世の墓をきらかく隋柳楚妻八ぞるやうなりて
世者更に求道此の所在乃しきまやたか其於乃

昭和十一年三月五日 購求

世にはいとしらねど嵐蘭は勝ることかくれなき
ぬ池と云ふありてあはれむかしは人のつくり
さくもわりしとも鴨来りける庭の華たにいまも
恐ひ根笹に杖をわくるに日の露めでたく
膳の先に筑波山を望み遊水の招く亀有
雉子の露に湿る古く流るゝこの川は白
く見し世は今戸の旭は稀に見るもあらしく
玉藻刈るむかしの古奈の辺は万葉集の古歌

我ならぬくれに渡り棊のすさひは利根関屋
深田河一望にほのかに孤松を松のかくまて
帆影なくあるにこそあれ鴻臺の夕照に眸をさく
らかし東へなひく深川の塔は雲やかすみて
石房の傍のよひ兵家山夕暮近く揚揚
今戸の瓦やく業は小野の炭焼赤穂の塩竈も
我なる深百山に幸近人のと流るゝ己その煙を
葉筋のまとる沼田の尾尾上のまくら無量寺

就晩鐘ハ日ぐらしのなくに暮るゝ御成坂の鶯ハ
まだ夜ごもりに啼て蜀魂ハ名のみ菜乃
眠きなかるに似たり旅の衣ハ旅日の雅びを勧め
閑古鳥ハうまき歌を詠しかゝする姿やさら田家
有り蘆火たき水鶏の声の月を慕ひたる比ハ下
谷中に早苗とる比ハ上野の鐘の音もまたれけり
颯すれバ田畑堤涯の雲間ハ車舟の錦雲か
まよひて咲女の靡まで露わたるかな[illegible]の

雲嶺にかけハ蛙ハ植田に沸天地ハ蝉の声に
無人なきあるさゆえ肘を曲て楽しむたぐひ
またあるねこ松風の海ハあまり鼻くそほぎさり
簞一瓢り焦熱の世中なりし銀河の横
たひて蛍籠見れ秋比ハ吉原を指さし義輪
坂本根岸より王子へ持あく狐火ハ袖の袂に指さ
れるそは乃なるに水あひむすこいるゝものとハ嘲に
更なる物見れ聞子ハ失て芒ハ彼より道灌山の

秋の月ハうき玉をしきてくの影にのかしみ
光陰ハ露の拾ひくるよりも速く葉末の露のに
不二なるぬらちを生前の年月をかさねては
首尾の枝ても心の霧にあまた霜をきさて
時雨の蓑笠ハ宝の名けれとも氷郷幽村の
柳にハ烏鵲の影なきも叢樹の霜をきるハ
寺観の屋根をもぬ一般に洞庭を雪まちして
尾ハ乱の末まて尽るものまよハ此上の見との也

あるハ蘿波の芦牧に行きまた枯てハ墨画の不
易なる風情あまたハ丹青の心をあらそきそへ乾
淵明の貴骨をあらしたる撥幽ハ筆をそくハ貞
室も天窓を採るも人を味噌の搦紙のこく
四時の眺望を指へたる此物名塚に媚をつくして
さしに瀟湘洞庭ハあつめかたく煤の暁傑の名を
美まてしたきの造化ハ大きいと成ぬまにハ
志賀の唐崎鐘子枕をよせ又来る春の

眼子正月試させむともふらく無何有の郷
にあそふ帰り

文化八年辛未

物見塚一點誌

道灌丘碑文

筑波　石正猗撰

里曰日暮寺曰本行在東都郭北寺有丘曰道灌丘奚名道灌太田氏之號乎里人思太田氏也里人奚思太田氏無忘其恵也寺西北有山亦曰道灌蓋山則太田氏保郭之遺而丘乃其斥候臺之址也故無丘唯址耳有之叙自里人之思太田氏也

自有丘二百有餘年于今矣相傳昔太田
氏既亾里人過其墟盡為禾黍閔壘壞臺
圮彷徨不忍去而丘其址爲故丘與山皆
用其號名矣寺舊在谷中里太田氏羣屛
攝之所在而道灌之曾孫今懸河侯世世
相承以守其祀也寺與群屛攝遷於斯里
者蓋寶永中也遷則得斯丘蓋不幾得矣
可不謂奇也稽諸譜牒太田氏名持資官

左衛門大夫道灌其號源光祿賴政十世
孫父道真名資清以永亨四年壬子生道
灌於相州扇谷少恢廓有大志博涉經史
善兵法明畫策是時天下戰爭諸國分裂
各據其黨迭為屛藩道真道灌二世屬管
領上杉氏府中推道灌贍智豪邁有文武
之材專委兵機之要長祿二年戊寅城武
州江戶焉而鎮之正其封疆險其走集每

與鄰國戰利在以寡勝衆兩毛二總諸城聞風震慴降者不絕大半為上杉氏之有者皆其力也既而州界寧肅百姓悅服道灌增脩德信以懷初附至敵國諸將皆謂彼專為德我專為暴是不戰而自服也寬正中道灌入京王人采道灌所詠國風奏

御

天子乃　賜　御製歌一章以褒揚之迄于今世所傳稱其人英武而文者可知也

寬延三年庚午寺主僧日忠與懸河大夫古屋孝長四宮成煥圖樹石于丘上俾余屬厥事石子曰昔道灌公之德及武州人豈猶荊人之思羊叔子乎不然何至斯里之人亦無忘其惠丘其址焉以貽諸後世也吾聞之羊叔子歿無子襄陽百姓於其平生游憩之所建廟立碑歲時享祀望其碑

者靡不墮淚唯灌公者異於此 國初時
其五世孫資宗始稟茅土之封食邑五萬
石寔為道顯公繇顯公又四世于今瓜瓞
緜緜奕葉昌阜其斯為盛矣方今懸河君
大夫以歳時朝東則春秋齊肅有事群屖
攝遂登斯丘望之必有若觀當其時褊裨
分隊憖勒弐馬旍旗繽紛白羽若月赤羽
如日辟司徒鋭司徒各慎其守猛士發揚
踊躍用兵乃皆延頸企踵以待作候之舉
燧者焉爾於是乎君大夫慨然無忘爾祖
聿脩厥德將慎其四竟完其守備訓有司
以義施小民以恵而光昭令名以示子孫
無忝監於斯乎然後知里人丘其址焉寺
主碑其丘焉皆有由也夫

一瓢上人の新室ハ俳士坂あそハし
めむれくなんぞてわきまへ一夜
ふ松のまへに墨を清てむかふ

夜ちかき涯を握りしかやもし　成美

不二川の浪をちらかす茄子の那　夯貨

板の戸やつゝき豆腐もうすい氷　百之

春風や小坂のちりに数ならぬ　鹿太

武人りこそ宿しと山の月　袁丁

立なにならでやらん猫が鼻　舟雅

芋がらや蝿ありかまけく年の暮　守静

いくむひとゝ風乃吹しきくの花　曲阿

手ならさぬ火よあるよりそ初水鶏　氷矢

ほとゝぎすれのうきはよる月想ふ　心非

名利よをもわするゝ花や坤ん座し

節季候の氷柱折ぬくいつまか　凡魯

情よ三ぬ毛を春や隅田川　朶年

時雨ふらしれ杉くさ伴よ舟波山　一峨

木からしや地花の堤城盛りつゝる　亀山

松風の小口へまり杉芭の花　峰 兎一

ゆくかしや大盃の手もとより　七人 浙江

虫のうむ藪の謾漸やり蛍　巣兆

風雅の野狐心作麿生

寝ま日乃暮山よ何うる心の哉　老阿

穂芒やうれしまらん果のあき　素嶠

ぬくくと親の居あけを冬籠　梅壽

啼つきる口をしそくかれ蓮のなか　周化

山まきや蟹やく家な申にして　一阿

起かしや気このまゝて霞の玉　諫園

何としあかし波に入る風もそ

隆達か節にかけくなます妻　仙骨

末枯を急まふ峰頭く榎かな　素岳

菜の花乃ゝ夜れくるや鳴の海　麥宇

人哉や藪の中より銀河　國村

かんつけて春の名見よ麥の穂　宥盧

馬出よりゆを駈行くや納豆汁　米堂

やくくた懐府なる月見かな　一蕙

去り月ハ葬おもの名りの乳　久藏

知足坊のこゑやいまするかまるをそ

炭そくゑを杖ふむ苔のうへ　道彦

名月やもれての松乃雫くいき　午心

しらそりとなるつや土用の第一苗　理峨

出茶ハ乞食の銭ルあつきこの飛　少年 徐柳

夕霧雲よハ二日ゝ三日月ゝ　李臺

蕣ハ画のとしこハ浮子ゝハつり　芳洲

雉子啼や不二を筑波ル窓の下　萬里

さみたれや小言男をまいやし

木陰さやそのゝ小家のむかしかな　斗月

おもきぬ春の月さへ山かつら　胡隼

焼鶏とハいはく四五日の名ものかな　碩布

造化なく野にはなり大根汁　来羽

あるちかの鹿たましきく露の空　東雨

心の駒とハ放埒乃そら言也

霄くらや何をまするたの虫しな　このつこ

立帰りて来て何てまれそさくい　可良久

麦蒔かせり出してや三日の月　春成

畧闘や坂ゆく九轉る松の年　護物
鶯は飛やちのら後入をして　春蟻
山さへなくちらくる隠して杉の札　宗瑞
いつれけしろ梅ありそのかた窓ちて
家恋を世は流るや春の風　逐志
我火桶其向まなり老くらむ　圃歩
すいくと何の訳なま芒り来　鼠墨
門なる大工ふりまる雪解られ　五渡

小僧らけ達磨ル九年こみたんな　民玉
降雪の枯木をつむもしやまきりな　九秋
坂口やすみまにら軒の雨　燕市
盆の月山はうくよいよ起く　ノ旦
去ぬら雨ごとは笑りい　九才
犬吼て猫鳴て秋の月夜こゝな　文勝
山寺なや凡抑しろなるもしあ　雨聲
苗松よ曳くしたく流く雨の降　仙菓

本の山も咲おれまく任侘ん　完来

うちに入り行基さんの小菜畠　任只

しられ祢いかの沢あり海と山　省已

かりあつめてし夕暮よ秋の艸　寥松

元もうて膝うちけくる人も

継穂して春鶯のしゝとこひくる　藍水

萩入やうれしまうすとちり行中　和扇

かへくと足跡ちきくの枯菊　春樹

梅ヶ香にあ已ての梅の莖　亞然

蛤乃口てりしをいやすさおかれのか　蛙足

何となれとなく聲よきるや草小庵　也好

牙船らんの鐘と去り行く夕霞み　一茶

甲斐國信玄の旧跡にて

菊いくる聲きくと成て日の細き　行脚 幽嘯

身の秋や紙帳からしれい菜まて虫　巣也

夕霧や紫苑よりくる野山乃旅　閑齋

四月廿八日於随齋亭

ゑりや袷着ゆくとおもふち　一瓢

庭は蓼つむ藪となりけり　成美

橋次の務かんにまいる柳笠　瓢

日ざし盛りのはもし下手の鞠音　美

喰後いく月夜もちかく蕎麦の花　瓢

むやくとして川舟ならぬ　美

秋の人袂まくらればいのりなん　丶

順り名をよふ六漱の居風呂　瓢

すやかな仏ゆかしく地蔵経　美

櫻もかしいつはりもおもかげなく　瓢

酔まま来ぬ紙燭付て帰るらん　丶

ひくきとき一諧有り人をかくして　美

十六夜ま腹のさわりとためやうに　瓢

ひらまてありまま露の宇治橋　美

名振舞手稲乃匂ひをほのめかし　瓢
何そといへと握つてわりある　美
一拍子ぬけるその也幕乃のち　瓢
めさまし顔まくりわ芥子菜さく　美
夏鱠ゝのあてなま春ルひろなて　瓢
家鴨杉ひらむ宿かへ於青　美
やまころままゆかくせし菖蒲太刀　、
迄乃あまさくまて於まれ其の　瓢

簑乃雨乳於神代うらむらん　美
さかとれうるに了笛はおし　瓢
松風於酒のむあまほあきせて　美
和後いまうけ寺於板敷　瓢
一しくわさらく於つとやけをし　美
鬼とし泣麺き須磨於あり海　瓢
夏餅のかゝひつまなる月をえて　美
秋於情むハいうふるすの那　瓢

枝もみち幣にかむ言のまゝ　美

わらくつも足をあらふ玉川　瓢

すゞしさはくらくするが旅して　美

正月ふし人乃たのゝの流　瓢

鬢ふく風飴乃小鳥をなかむ　美

ふ絵さ絵くゝも田ふし囀なり

各十八句

山城

春の海浮かれ出てにおとひゐる　蒼虬

まだらきや光り世をかるゝ雪と水　瓦全

ちの流れきはやらなり妻の飯路　丈左

まてしたのま日そや田螺の啼て　茂良

花よあそひ水みたちけしも今たく

月夜の杜もはなりもう見えの山　華朗

杜宇紙帽子として尺転かりけり　斤崖

夜寒さハ月ハさえて鳴な鶴　岱李

信楽ハ水も漏さぬ蓬莱哉　土卯

萩すゝき我ハ方角となりにけり　月居

摂津

天晴れ一葉涼し月ハ哉　長斎

故屋乃月このしつれまよふころ哉　魯隠

鶏の吟目とこほせ蓬莱哉　尺艾

かんしんの道も蓬莱は借もの哉　万和

あらく雨のちこむ清水哉　奇淵

まそしとすゝきや見えくれせん

蓬らの昼貞の其れ浮葉への哉　釣翁

出て来てきりくなりな花の中　麥太

橋は雪もたしな月根のれ　米彦

正月もゑく河也山乃家　井眉

歌菊も撓見女ちるの旅の秋　八千坊

元日ありなるとわきんハ二日かな　稲丸

不断来れ人も見ゆるや畠道　桐栖

鶯も今ハ里なれむ菜の花

春の影も夜ハいつくまてあれ　一草

野の梅乃香みそそ夜ハなかりけり　瓜坊

鶯もの起てゐるもの窓の前　三津人

よき忘れして居る船や宵の雨　竹齋

稲妻や原よりいつる乃ゑの人　友國

ちよのつゆも置ていおもしろ草の秋　升六

大和

ころゆく不二八幸くて菊の花　空阿

船頭のやつと見の見る眼寒けな　拾葉

つい摘入出ても川越茶畑哉　和山

河内

すしきの穴から這く処和の樫　未䢓

鶺鴒のつらを上るころや山の月　八之

晴天城あつけの帰や関古鳥　蓬宇

一　和泉

一もとの花となれ穂や蟋蟀　喜齋

また夏といはれて月は花雪　句竜

灌佛の湯に梳せる髪の癖　荷風

尾張

降雨をなぐさめしつゝ今宵の月　士朗

手の皺をさすりする也兄の青麻式　桂五

垣ひとつ動かさるゝのよ撫子の花　天光

名月やもろこしかけ松のかし　梅間

湖やきし峰山はゝの夢のさかり　竹有

さくらちるや蛙や膳所は一重町　少汝

百年し活てくれぬそ今宵の月　大阜

山里や蕣の莖ルゞは枝はまる　五雄

さゞすのに年のきさしめら

来もちてあけ正月のまちわびる　黄山

松風やいつしの蔓ハ月のあれ　鹿野

日暮てやうさぎの耳の動く時　搓雀

世乃人をさらさらにて宵の月　岳輅

伊勢

木がらしや桜紅葉の衣すてて　椿堂

白い花さくや麦野ゝ名なし草　丘高

絹よりのお白き中まで着る妻の香　推己

鶴田へのさかいしもあふさを

難波津の古し貴顔や若葉の色　草翠

若のまれ咲や十よるの旅草鞋　孔阜

勝鴫ならす日にうちよせる日のか　為徳

母のおしへにすて

葉乃やくにたらし月日の影　路白

志摩

うろもかくのくれいる漁師の宿　緋山

伊賀

もちこれて尻やる鴨の雫つれ　清江

しなのころもりかふしね桧笠　猪葉

大佛は肩子二月のあらしかな　羅十

遠江

大井河ともよい一舟あまて夜は月　嵐荘

襟ことに　こ乃はくや梅の花　露香

巣のこの子棟くせのつくや豆の月　蓼秋

不情秋やま秋山

雪は夜はなれともまこのれ火吹竹　栞克

白梅は空は笛焚ゆめの雨　緒序

揚雲雀日もけい舟へおちさくれ　佩月

達ア忌や永日一筋茶の名月　露瑛

うめの花も帰より尋て花乐也　其白

駿河

啼燕翼はしるたらそかり　沾吏

戸をたゝして青山ゆかむ鹿の声　郁哉

伊豆

飛ちるや蛍に中りてこゝ乞食　西牛

維子なくや吹わたる月の暈　雨吟

猪乃ほく／＼行や野の霧　素石

三河

名月はまれなり山家の西の形　卓池

ものゝ音を見てハ帰らん菓子代　秋挙

かくれ家ハ浮世なりけり並好の語おもふ人

山畑や人逃のこして麦の今月の形　岱呂

松風のやとハ帰なき不古雪　普天

秋雨の月吹かれて山のうへ　百秋

風や人は蛍にすゝむ新清師　佳雄

もゝ代に影あるゝかりそめ　棋堂

甲斐

一銭の茶にこそ八重霞　可都里

山吹や雛子は帰されたら拍子　有斐

ちる花にまかせよ山路の畠　漫々

風まなき花のあとやむらしぐれ　蟹守

蝸舎さらに出勤に

出かへし月まちかねてまつりかな　重行

花の香や松は峻岨をちるのみ　思謙

峠より日よりの釈十里の滝の音　嵐外

相撲

川やしろこかくする音さへはらちかの　葛三

帷子を着る身もなく老すかり　玉珂

浦の秋朝日ゆ出るけふのみちすり　徐來

枯きく乃焚れ残へしく花かり　来之

数鎚や用心もなかほとゝぎす　石年

芽柳のむしも見るまゝ志づの戸　方解

旅人ともみし霧のなか尻つき　雉啄

下總

ふり待けるやうに下るや霧の香　雨塘

ねふかきへましたくや秋の風　双樹

さゝなきや煙にまよふ夕つはめ　太節

七人

松風に出て行きゝや雨の跡　恒丸

若芽生や孫生ハ空きたから中　兄直

八月やまつれに枝すてあらしの　柑翠

　孫楚か枕をむかふ中の誰ぞや

すゝ流に石をうけ出なりのれゐ　融州

踊まく〳〵鉾まはるゆゑて月更て　鶴老

かゝしろに冬へて流を旅の杖　素迪

うき秋は霜を見して枯木のれ　維平

木からしや薪あつめし山の月　簑輔

鶯くの菜売や飛て三そさくい　和十

　春到て品物すゝみてあゝ遊

鶯りし鳴きて時雨小蓮の雪　竹人

門口に雉子あそびてゆくまいれ道　兎什

下崩や茶乃みの薜九五十年　此蘭

盆の月明ける方のる楽ひくる　一聲

牙乃くの採よへてや善十風　右耕

覚きり起り部さし森ル松し　兎乙

行くと子ひとつ二朱さく菅子くの　巴陵

いさよひ清し私のたくひよいあらさ

二日雨四日晴天障らし我り　七人　寂阿

涼風やはれすのし紙鎰乳　一叟

安房

親の夢旅寐乃盆ル志てごめ女　杉長

汁の実よむしりのこてし椒の花　郁賀

汐くみ乃かの沖し並猪多　宗拱

盆るうはまりや何ぞのまうしに　也草

夕立やこんをさろ子亀の甲　呂風

朧とし山家いさやし足袋の土　其文

菜のもそや秋ル知らつく壁の際　桃阿

上総

二日灸吉野こゝろたよひや夫つ　輪之

行春や笑しく妙猫の眼　棋柯

舟に出て日をつなぐ遊春の風　野翠

常陸

膳すての箸ころげしけしかもの哉　翠兄

たち居ても芽出る日影を木薬哉　湖中

鶯も蒲あしくらんよ蕣粥　遅月

しら露や瀬ゝつきしわたれ池へ　千万里

朝起しする是荒の日記かな　淂雨

上野

月雪の舞の團子や大播磨　米室

盆過や雨を見て居るもまれ家　月鴻

鶯の巣もありけりなりぬ柴の蕎　蘿月

養在深閨人未識。

花梅や窓あいたるの窓まつり　根菅

鸞の啼眠さともちらけ十團子　朴武

うらひよに若葉かくれの小家哉　玄耕

ちり出て人に見えするゝ山さくら　阿兮

下野

七種り鶴の蹄さる茶をあらし　雄尾

腹のよれ犬のあくあらやむしろの　和井

山里やわとわるゝやれ梅のちる　五雲

華法の鉢採れ淋しすられ咲　魚と岐

きけや世は貧たとへ上手下手　魚文

信濃

ともなへいまや夢見ぬ菜代　素檗

陽炎やきみのいすけらる木履の跡　雲帯

まれのまたにおもて静まる夜汐哉　武曰

山の垂乃そよりを菅足し　虎杖

いま師とせることなれとハいへと

手折り傳へしのこゝろも菜ちらす　如毛

米浜岸のかくゝ陽炎やゝしのを　湖光

山陰は飛ききき月乃又やかし　蕉雨

美濃

闇の夜乃あほぎとおもふ師走かな　千阿

里人ハおろ拝むる不破の月　楚雀

梅ハまた此節季もよその猫の恋　良平

寒月のあたらに桐の立枝かれ　桃源

蚊はしらのまつはれてたまはしらかな　一居

加賀

むら山に比良の陰まで春かすみ　眉山

朝のおき酔ひ醒し燕子花　甘谷

あらしや出る日の艶なまくハの花　万栖

ちるよ日や蠅もしづまる牛の角　不友

月ハりを名もしたゝれ柳ハしつかなり　五葉

越中

春がすみとしらずて人の青麻かな　嵐丈

おのくハ嶋も松しらあかるれ　如岡

うらめしきかへや遠見る軒の月　大翼

名月やちよの座しま浪かしら　棊風

来ぬるハあされ小野の友つゝき　白年

近江

煙こそ細りかの世松風井の露と　五来

傘のしほくおもひや妻の海　千影

田畠の色ありもみてし秋の月　芳之

両國乃竹ニ逆ふ雲よほとゝきす　可盈

寒き日のまめかに謝る戸口のあか　重塊

家鴨子も拔ゝ蔵くて隙になる　于當

重への日と菊ハ見きれ八重葎　志宇

こ祝とかのれ乃かまれのも

何雪とれみち祝くましてま芭　柏翠

十月や足ゆる小家の構への形　五粒

尻すゑて鶴のすとる春日哉　寵山

さゝけ飯秋を白ハにむしろかれ　文常

山さくら二人すまゐハさたかし哉　仙風

五月四日於雪耕菴

夕暮や蚊が喰出してころつれ　一茶

すしいさのは赤ハてうちん　一瓢

露志くれなゝく松乃実ありて　茶

筆一本もし秋ハ來る宿　瓢

月ゞ夢の望日ハ湖ものおきやうに　茶

蒲團の下へ子鞋かいこむ　瓢

西念ハ願の通りあはれなり　茶

雨のあまりかきたてる灯花　瓢

桐のされ志の糸車と筋違せ　茶

縫のきその袖もひくによそほく　瓢

蕎麦切の森覚の里ヲ年寄て　茶

九くなる小走ハ月九月　瓢

召あへ蟬囀おわく哉　茶

しひまさも海しに御業へ下出る　瓢

肥後米の買そこなひを笑はれて　茶

人よかくして笠子字知のく　瓢

柳ほとゝ寺のおもしろく咲にけり　茶

鶯古巣討て持つこの東風　瓢

蛤乃えらみて崩す大雪変　、

よんで夢見まる菜くわるお　茶

むかしのても別れは旅ハ出のりて　瓢

あさまくしつらり乃雪　茶

膳棚ハ嵐のまたのさけのめに　瓢

二人ゝふたり京きらひ也　茶

碁にまけて詠むる雲もなくかぞ　瓢

野なかし山なしこれころもこの〜　茶

押出は七里の船子素・湯焚て　瓢

南無観世音ありかたの月　茶

白露の足もいつれへさしのむ　瓢

代ゝとあつれ窓乃葛　萬　茶

宗旦か末の弟子となり成しれも　瓢

涼山しくれのうれぬ見れなし　茶

をしまれて死るゝ人のまうけ猫　瓢

そのまゝ花のみこぼるゝ宮く　茶

うめ見し桜をちらし散り花ころ　瓢

文化八年日暮里の春　茶

各十八句

陸奥

すゝきや顔のやうに吹きまかれ　乙二

たゞ居まゝ蕪に袖をうちしめり　冥之

あきの日の青山いろに咲きまかれ　巣居

銀河秋一すちは秋のくしき　雄淵

青柳のさく枝はうつ雀かな　曰人

茅の戸や遊かられてし秋の暮　百非

蝸ふくやいなの笹原越やうに　文郷

蟋蟀啼までは松をしる人　平角

はしきれ蘭女が都に啼わかれ　きよ女

老くされ花見るまでを今ませ　雨考

口あれハ陰肩に阿まハ着る

三日月まで合の坂越らん那ちの　春翠

鼻つらむてうしは長もあけ河つる　旦く

山伏の聲よる趣也山やまさ見　與人

ゑとも香も桃の人越え秋の雛　八風

翌日こそと待日ももれ鷄ほど　沾橋

めとみ来て見まへ酒ちまと青柚だ　北溟

わつの茶林そのまかそへ京に蛙の乳　冥也

もろ給ゆへあく二日延りくの　秋夫

白うるわとは何物をいるや

去りし落やへちすれ蔓のむかし　素郷

まてしものよそあく杖のあつまる　雛路

松の木乃細くしかし濡すりくす　里棠

もつ雲やちらりのと落る鳥か　亡人 桃径

採て起く鍬なきものたよりなし　乙因

隅の木まで燕比くせる箆のかれ　彦貫

せりかゝる暁なれと初さくら　英里

出羽

秋の風極くへる暑比林かな　長翠

萩芒いろくの名を枯にけり　五瓢

嘗れなやよしあしの二月かな　成雅

三日月は松ろのしたる時雨かな　野松

鐘を撞ちつくせてそ蚕捨る　和鳥

佐渡

流れくる杉ものをみるやさゝの杖　白波

雲寺のほとけまたまかり蝸牛　可圭

飛騨

夕立のゐて人来む菴の外　儲史

ほよしと名詠て盗む瓢かな　一左

嵐もみちもまきたなひくも老まくら　歩蕭

越後

傘しほる人のそではあやめかな　宇瓊

行春や呼かへしても泣上戸　祖明

窓口の風のたつる穂尾花かな　左琴

春は水むかふ上わに流るゝ紀　年眉

一片氷心

涼しさをかくなからはれうろへ　子功

木からしや大根のからさかしなり　竹里

一日の菖蒲まちほしき髪の癖　時来

或時は蝶としてとふや庵の戸　清之

青柳の影ふむころも嫉まれり　喜年

雀まてわするゝやしなる秋の風　由都笛

能登

春風やすゝめ吹越長鞠かな　茂十

すみれまて無際あかりて芹薺　淂三

越前

八月ハ京の入日も芭この影　仙草

涼しやとおもひ初る早苗かな　友甫

若狭

大根どのふつハものや冬籠り　北雅

丹波

うちとけて見ゆるハ菜の木百かな　武陵

旅ハ霞の中ねぶりよおく桜かな　滄洲

夜の海暮るくしきハなまこかの　三笑

丹後

六月を寒し納る紙帳の形　萬籟

十月や隣木踊る紙衣鴨　蚕山

但馬

ゆきに隠れてまいるかや秋の暮れ　菊蓉

遅しそしあけて桜の日数かな　南飛

因幡

つまんて菊養にかくあやしさかな　馬陵

月のかけとて杖のあたりかな　梅村

蕗く薹りうのゝ雪や山かけ　李謙

伯耆

煤掃し秋のしつまりや縁の露　白章

出雲

さりけなきものゝ師走は月夜哉　華叔

夕立は草木の風のるあつさかな　元日坊

隠岐

紫陽花を咲せて来る閑子哉　豊川

石見

まつ風のひゞきかくれなく蛙　可成

播磨

藝あまたハ猿も正月小袖かな　玉屑

菊かまえてあらくと見の薄紅葉　布舟

みたひよ菜はわすれけり花菫　蝸國

美作

水仙はさきそめて親は眉のうち　安洲

備前

陽炎は流れゆくまて水草哉　陶士

安藝

膝の上あすりて行や春あらし　竹葉

退すさるゝ何旅に我か麦の店　玄蛙

あさくはれ這出て来る虎狼の子　可友

たしまやこの夏の家つれ一ところ　路宅

家建るたしあまいふやまつりく　篤老

周防

まちかし休みし蟾に見る其行　天民

窓は月持ちて蚊屋つる猫の家　鯨牙

長門

行てもくみちこそなれ萩の花　羅風

雀子や飛白くる出は萩のお　冬蘿

渡る秋の新端に出る鶴の声　橘川

備後

大雪や何処に隠れてほとゝぎす　寄居虫

冬の野や冬の月まで照りけり　岱雨

ときすて社雪ほどさむく出る月夜哉　浴蘭

備中

初秋の淋さ庭紋屋の軒ゝの札　斗外

露ゝあて秋のまされよ銀河　蘭香

春雨やちらちらうつる京の春　巾婦女

阿波

蕣のまかせは人まゝし秋のくれ　夷柏

雪を踏て早苗植ゐの田子らかな　蘭秀

伊豫

水うつや掃や植る竹の露　携堂

夜あらしの秋雲ほどさえて秋の風　蘭郷

蝉の声ちらちら人影草屋ゝの秋　遊月

露のやどるほとは樹もあれ里の家　其梅

讃岐

麻の葉にわたる秋風かれ木立　桃里

秋ちるよ夜半や梶舟の行の細り　遊峯

土佐

何事やらに風呂焚嗅や朧月　路右

七里来てまた置子月や藤の花　里青

筑前

秋風はおもしろかりても月夜の声　此原

子松茸芝乃茎をよまくし　亀陸

桃の実は葉下に揺らる暑かな　文志

筑後

気比の山ましへり出蕎麦刈　文角

月の影さえあおちる柳の声　官柳

小鹿ハいろしもあれかなやま子　輅兆

おはけどう他の木たてく子作りかな　錢舟

水多ゐなり流れて日ハ永し　石狗

紀伊

萍や魚追ふ瀬に根をたゝれ　塊亭

伏れの陶蛙を築山にすえて

遠いそくれのれをしあけよ五月雨　糸丸

豊前

瀬ハ耳のかよひいて鹿の声　如柳

祖師の忌の冬ル葉汁や白つゝし　木父

淡路

湖をつれてゆくゑや燕子の声　青城

うらむすとちた宿られゝ冬木　五陵

ものゝる秋やとて秋あきれ嵐かな　冬柱

豊後

門より内ハあまゐしる人の跡のれ　月代

火ともし移ハ二度の気なちる桜　真澄

総秋の底にあるなるなすみ去　霞城

足よりも近江の海そ多難し　葵亭

萩芒朝のうちかゝる立所の形　羅川

嵐れまぬ日くれ中のたわゝなり　有篁

日向

大かたは月掛しめて薬盛ん　尚故

みのむしは暮行くさして時雨けり　圃友

水ゝかれて水の桜に誰かこゝろほとく

蔵をうりまゝちれをやまきのうへ　蝸牛

水まさけるのかり香し閑古鳥　蘆笛

肥後

紙帽して垣のうれたかふまれ　對竹

桐のまれはし雑ゝ動かす柳の影　如凧

降るかもはたゝ陽出る杜のくれ　瑚璉

肥前

今更り丹楓なかりて里枯尾花　菊也

さしみ盛よきのちれ近棟のまた　祥禾

皆子か秋を芭のさつの乗の形　鞍凤

一井戸が汲むも町や盆の月　南無

をしみ句も皆満ふかわ不二の山　天外

大隅

其の名野鍛冶の窓とあくわらの　雅松

古皆をとうけても出るやまつらて　万川

壹岐

鎌倉や小隙ものをなく鶉　紅雪

對馬

うへすへわして押しろや若菜摘　九魯

ほとゝ入や向ふへたしう栄の末原　曙堂

薩摩

生きしもあの小道そ冬木立　関叟

八重簾軒へあやめの日あまもゝれ　琴洲

いつまてあ糺まさのなけよまつ鴨　巴水

おしくて雪の戸が押明ぞかれ　一翁

なま人と用しく飛鳥山の出ゆて見え
野や物見塚よりやりくる瓢主人ともの
草なとをとて見ゆるみへく孫と妻
膝の上なみくらしゆかれ

走り咲萩やほつちり灯ころは　一瓢
麻みをし起るかお後の月　成美
露の隣り船よ小舟のすりあけて　久蔵

登すあきしみれ真椎のよられ　諫圃
ゆくしくは蔓よりしたる風車　表丁
泊をそひく砂から乃園　瓢
大亀ぬ岩よ家と人まよ　美
かれき内侍よきとうしわつ　蔵
こひといふも小河ひよつし越かねて　圃
草のいきまや苦桃乃时　丁
風の袂迄わてあさハ隙うちに　瓢

かゝりさへ肩にかゝる宿から　美
もみぢし破れやすくも茶に染て　臧
たらひの底はそれとなき月　圃
栗寺は縄を引なる坂の上　丁
手ばなしいてもあすむは日　瓢
茱萸なの中まで猶ひ来て　美
まつひ法度を出し春風　臧

一瓢四　成美四　久臧四　諫圃三

表丁三

草庵四時

小むらけの雑子と啼なる声の遠つ宗　一瓢
朝めしに思案をいふにくしのなし
夕月は何事よしあまとも子乃門
おちまして宮ふ椊のつし赤昼
埋火のそわゝ沈る　極楽の

これぞ上人坐右の日記をしたて
そのほかに何くれぬやかなしきもと
よろづ紀乃名の世にまことあるを
いとひてうぶかしき山里に籠りし里
みな人とおなしと紀ものあはれ
にたつ〇よるきえひくりも
古き筆をたてゝすめまつらくなれとく

露花同みかのこ為なるしきて紫蘭
紀香にひこの其楠の木枝にまろこ里
ありたるききれに跡のこゝえへよとある
につきこの紀西に燕詞くちふる事の何
まことひたのえ人何かおもくろしの修の
柿入道の葉たるひやたらとことし人
たゝの紀給えしゝ紙きめまれたなにるゝの

かゝる此集の眉目成やそこなるへしと
おもふにつけても此たくひなけれ
おきぬ古き那沛寺も文明のむかし
灌公ははしめにしるしたるも上人の記
中にはつまりかの公乃らのみとこころへき物
多くはくそくれるうたに香林堂にかく
ける碑口一口のうちり經五寸はかりも

紫稲ふかくはひきあめ古色愛し
はなはしめくのに志願のおもむき
をたはし公乃諱年月まてかゝや
かに鐫付あり二被牙一の寺銘は
まくいみ打碑の法はちからくいうち
書いはらのむあやまりし此所にあり
写し出しれ是をもて跋文一耳

換韻のぬなき里

随齋 製

宮氏